

富田富士雄，小林照夫，柴漁業協同組合編集委員会編著

「蒼穹の下漁鱗輝きし地」

—柴漁業協同組合史—

安彦正一

(群馬女子短期大学)

1 はじめに

ウオーターフロント，臨海部の開発，埋立事業など沿岸整備によって港湾も大きく変貌しつつある。こうした状況と下で，この度沿岸漁業を対象にした漁業協同組合史が刊行された。本書は副題に示す如く横浜市金沢区柴町にある柴漁業組合が，80年余の歴史を閉じ，解散することになったのを記念してまとめられたのである。400頁余に及ぶ本書の随所には漁業関係の写真が挿入され，読者及び関係者の理解を助けている。本書刊行の経緯は「あとがき」にも述べているように，関東学院大学の富田富士雄教授が柴漁協の人たちと一緒に研究会を組織し学習を進められていた。しかし，富田教授は「漁業史についても業績を持ち，なお柴町は同教授の属している大学の地元であり，直接間接に親しくしてきた地域だから真に適任者である」とし，小林照夫教授を紹介した。従って本書は事実上小林教授がまとめられたといえる。同氏の紹介は改めてするまでもなく，港湾史，漁港史を専門に問うており，本書の執筆者としてはまさに適任者であるといえよう。又本学会の編集幹事としても，学会の発展に尽力していることは周知のとおりである。

さて，本書の内容を章別に以下紹介していこう。

2 本書の構成と内容紹介

本書の全体構成は以下のとおりである。

第1部 序章，第1章「柴の漁業集落」

第2章「明治前期の柴村」第3章「漁業法則下の柴村」第4章「柴村の青年会」

第5章「大正期の柴村」第6章「昭和初期の柴村」第7章「戦時経済統制下の柴町」

第8章「戦後の漁業の再建」第9章「柴漁業協同組合」第10章「重化学工業時代の柴の漁業」第11章「臨海部開発に伴う柴漁業協同組合の対応」終章「創造的に活動する柴の漁民」

第2部「伝承に基づく漁業生活文化史」，「資料編」

本書は二部構成をとっており，第一部は本書の中心をなす柴漁業組合の史的考察が論述され，二部では地元漁業者の参加執筆による生活，文化史が記述される。

序章には富田富士雄教授が，本書の問題意識を寄稿されている。本書は「これまでの漁業生活の歩みを史料にもとずきながら復元的に振り返ることによって，ただ単な

る個別の漁業組合の変遷史としてではなく、内港漁業のこれまでの歩みが全体として展望しうる」ことを前提として本書をまとめられたのである。更に本書の課題について「柴の一組合史という位置づけに終ることなく、柴漁業の歩みが横浜の漁業の歩みであり、同時に東京湾内漁業の実態をある意味で把握しうる課題」として進めたとする。そのような作業の軌跡は第1章から首尾一貫し、本書に結実されている。

先ず、本書の内容を章別に簡単に紹介しよう。

第1章では、柴村の漁業集落の形成から、江戸時代末期までの、漁業議定書を基軸に考察がなされる。その場合、漁業者間に定められた三十八職の漁職の内容は評者にとっても興味深くさせられる。

第2章では、明治前期の柴村の漁業生活史が描写される。わけても経済の近代化の進展は、魚の需要を増加させ、柴村でも漁獲の増加をさせるため、他県への漁場侵入問題を主題としつつ、漁業慣行などに及びその点を史料で実証づけている。

第3章では、漁業法が公布されたもとの柴村の対応が考察される。そこでは漁業組合が設立され、明治後期には再び改正漁業法が公布される内容が説明される。筆者は明治期全体を通じ柴の漁業者について、漁師は種々の漁具で広範な漁業活動を行っていたと総括する。

第4章では、柴村の青年会の設立経過、ならびに、役割を考察される。現在柴町には「青年会」はないが、戦前まで組織されていた「青年会は、柴の文化活動に多大な貢献をした」とされる。

第5章では、大正期の柴村の漁業生活が考察される。「改正漁業法」により柴村の漁業も順調な状況を示し、筆者は「大正期の海苔養殖の基盤が、昭和期に結実し、村民の生活を支えたばかりでなく、漁業組合の重要な財源となった」と指摘する。同時に柴村に隣接した野島漁組との入漁契約問題などにも論及する。

第6章以下は、昭和期の柴村の漁業生活を中心とした問題が展開される。例えば、漁業組合の規約改正問題、地域外漁場の確保の経過、金井佐次の埋立事業問題などを考察し、併せて海苔養殖事業の詳細な考察がなされる。

その後、湘南電気鉄道が開通するが、海水浴場の開設に伴い地曳網漁に影響がでる問題、反面、柴の漁業集落にも滞在客が増え、土産物などを購入する光景は、「柴に文化的諸条件を作った」とし、その意義を評価する。

第7章では、日中戦争から全面戦争へと拡大した情勢下の柴町漁業組合がリアルに描かれる。戦時下では多くの法律が改正され、これまでの漁業組合は「漁業会」に改組され、柴漁業会が設立されるが、戦争の拡大は柴の漁業に影響を与える。筆者は戦時経済統制からの影響、柴漁業の立地（軍事基地横須賀に隣接していた）の問題から考察している。それは県より各漁協組に「統制要項」「通達」が発信され、漁業生活での制約を受ける実態、漁場としていた漁業権の放棄の問題などを詳細に考察せられる。

第8章では、戦後の柴町の漁業再建策が考察されている。とりわけ戦争が終結した国土は焦土と化し、価格の暴騰や配給の混乱、物資の欠乏。こうした状況下で漁業会は役員が選任され、再建策が協議され、柴漁業はタイラギ（平貝）と海苔の養殖で復興をはかった。

次いで、漁業の再開をかけての漁港修築事業の工事内容が展開される。

第9章では、各種の団体が整理され「水産業団体法」も整理改正され、「漁業法及び漁業施行法」が成立した。筆者は旧漁業法との新漁業法との漁業権の比較を試みるとともに、柴漁業協同組合の成立経緯を考察され、その中での具体的な事業内容を個別に検討される。

第10章では、戦後の日本経済の急速な発展を特徴づける重化学工業下での、臨海部の開発、埋立事業、港湾の整備拡張問題が考察され、特に開発に伴う環境問題を懸念しつつ、漁業権と補償問題などを詳述する。わけても一度取得した漁業権が徐々に放棄していく過程は、わが国の漁業に共通した悩みが切実につたわってくる。

第11章では、昭和44年の横須賀市夏島地先の住友重機工業の埋立工事をめぐっての会社側と柴漁業協同組合との対応が考察され、同時に金沢地先埋立をめぐっての漁業補償問題及び、それに関連した転業問題についての検討がなされる。かくして、残存漁業者と市内の漁業者とによって、横浜市漁業協同組合が設立されるに至った。筆者は「柴漁業協同組合は、これまでの固有の機能と役割に一つの歴史的区切りをつけた」と指摘する。

終章では、筆者は「海苔養殖に伴う風物詩的な情景はしだいに姿を消してゆき、現在ではその光景は昔々のものと化した」と、昭和40年以降の横浜の海的环境変化を叙述し、戦後の漁業問題の推移を顧りみる。その中でも横浜市漁業協同組合は三支所を有し、柴支所は、組合員数、漁船数共一番多く、漁獲高も全体の7割を占めている等を統計表で示す。現在では小型底曳網漁が盛んで、漁種はシャコで「シャコの小柴」との表現が業界に定着した点、更に組合直営による販売所を開設して、地元の漁などを売る柴漁民の活動が示めされる。このことは筆者のいうように「あくまでも地域の住民に、東京湾の漁にこれまで以上の理解がゆきわたればという観点」で考えられたのであり、「東京湾内の漁業を共に考えることのできる“場”の構築が可能となる」という展開で、環境問題の保全に一つの問題提起をしているのである。

その成果として、直売所に対する関心は高まっており、そのことが、漁業を核とした地域住民の語らいの距離が縮まったのであるとしている。

第2部は、第1章～7章に分かれ、地元漁業組合員の執筆による、柴の漁業文化、民俗年中行事など広範な伝承を叙述してくれる。なかでも、家田洋文が柴村の青年会を組織し、その活動は同村に大きな貢献をなしたと指摘する。それゆえ、同氏が郷土についての詳細な知識をもち、まとめた「柴郷土史」は貴重な資料になっていると指摘する。

次に、資料編では、柴漁業協同組合の歴史年表、明治35年10月柴漁業協同組合設立以降の歴代組合役員及び組合総代名簿、解散時組合員慢名簿などが掲載され、漁業関係者の便宜をはかっている。

3 本書の意義とまとめ

以上のように本書は、江戸末期から、明治、大正、昭和をへて敗戦期、戦後から現在に至る柴漁業協同組合を丹念に追求し、総体として、今後の漁業組合ならびに沿岸漁業の課題を探ろうとするものである。

改まるまでもなく、現在多くの港湾、沿岸域の環境は悪化し、本書に叙述してあるように真の海が失われつつある。その中で柴漁民の渥しき、漁業制度の複雑な側面など多くの事実を評者は本書から学ぶことができた。してみれば、多くの史料に取り組み本書を完成された小林教授、富田富士雄教授を中心とした漁業関係者達の努力に敬意を表するものである。敢えて注文すれば、本書が業界との協同研究であるため、やや平板な印象は免れない。とはいえ、それは本書のメリットをいささかたりとも減ずるものではない。むしろ、我国の沿岸漁業史研究に貴重な一歩を進めた実証的な労作であるとともに、今後の研究への出発点を切開いた本書の意義は大きい。港湾関係者、漁業関係者のみならず多くの方々にお勧めできる書である。

(平成2年柴漁業協同組合刊)

(非売品)